

陸前高田市高田町の神社を一次避難所にするための地域防災計画案

中央大学 学生員 ○村上 将

中央大学 正会員 平野 廣和

1. はじめに

岩手県陸前高田市は、2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う巨大津波により、県内で最大の犠牲者数を発生させた。特に、市の中心地である高田町の人的被害・家屋流失被害は甚大であった。このような事態となった背景には、高田町が過去の津波における被害が、周辺部と比較して軽微であったため、巨大津波に対する警戒が薄かったことが原因の一つと推定される。このような状況の中、同町内では津波の被害を免れた神社が数多く存在することが発災直後の調査¹⁾で判明した。その神社の多くは、無人かつ非常に小さな神社が多く、また鳥居が被災している神社もあるものの、社殿は浸水を受けなかった。これと同様なことは、福島県沿岸部²⁾や宇多らの研究³⁾でも指摘されている。このような神社を今後新たな地域の一次避難所として活用するために、本報ではこれら神社の具体的な一次避難所化に向けた地域防災計画案を提案するものである。

2. 陸前高田市高田町内神社の調査結果

高田町内には内陸部を含めて10の神社が存在するが、本調査では市街地付近に鎮座していた神社8社を対象とした。この8社の内、津波により被災し流失した神社は市神宮と八坂神社、鳥居は被災したものの社殿が無事だった神社は愛宕神社、天照御祖神社、本宮神社、鳥居も社殿も浸水を免れた神社は禊瀧神社、残りの貴船神社と保呂羽様は鳥居が存在せず、社殿は浸水を免れている。これらを表-1に、さらに津波浸水域と神社の位置関係を図-1にそれぞれ示す。

この8社の間では参道などの整備の状況も神社によって異なっている。写真-1(a)の天照御祖神社は、階段がコンクリート製など管理が行き届いているのに対して、その他の写真-1(b)~(d)に示す神社は、丸太の手すりが備え付けられているもの、階段ではなく獣道状態となっているものがある。したがって、これらの神社を一次避難所化するためには、参道等の改修が欠かせないといえる。

また、一般的に高台の桮に建つ鳥居が被災しているケースが多いことから、避難をする人々は鳥居までたどり着いて安心するのではなく、社殿を目指して避難をしなければならない。ここで、表-1に示す社殿の被災を免れた6社は、いずれも標高30m以上の地点に鎮座していたのに対し、被災した2社はどちらも標高10m未満の地点に鎮座していたことがわかった。このことから、東日本大震災の津波を基準とするならば、標高30m以上の場所に建つ神社を一次避難所に指定するのが適切であると考えられる。

表-1 高田町内の各神社の被害概要一覧表

高田町内の神社	遷宮年代	被災状況(鳥居)	被災状況(社殿)	鎮座場所標高
愛宕神社	不明	浸水・残存	被害なし	約30m
天照御祖神社	1940年	浸水・流失	被害なし	約45m
禊瀧神社	1940年	被害なし	被害なし	約32m
貴船神社	不明	—	被害なし	約35m
保呂羽様	不明	—	被害なし	約40m
市神宮	1803年～1830年	浸水・流失	被災・流失	約2m
本宮神社	不明	浸水・流失	被害なし	約30m
八坂神社	1929年	浸水・流失	被災・流失?解体?	約5m



図-1 津波浸水域と神社の位置関係図



(a) 天照御祖神社



(b) 禊瀧神社



(c) 本宮神社



(d) 八坂神社

写真-1 各神社の参道の様子

3. 一次避難所化に向けての神社周辺の整備

(1) 神社の整備

参道が整備されていた神社は、東日本大震災以前から一次避難所に指定されていた天照御祖神社のみである。その他の神社は簡易な階段が備えられるか、坂道となっている。ここでこの地域の特徴は、高齢者の人口が多く中には体の不自由な高齢者も多い点である。

キーワード：東日本大震災、津波被害、神社、一次避難所、陸前高田市

連絡先：〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1 中央大学総合政策学部 tel.042-674-4170 E-mail:a10.mbd8@g.chuo-u.ac.jp

したがって参道は階段ではなく緩やかな手すり付きスロープなどの方が好ましく、これならば車いすでも社殿まで上がることができる。

次に注目する点は、神社の敷地内に広場が設けられているか否かである。避難所となる所には当然多くの住民が集まってくるため、安全に待機できる空間が神社に必要となる。しかし、写真-2(a)に示す本丸公園広場を併設する天照御祖神社のみ大きな広場を有しているのが現状である。したがってこのような広場の無いその他の神社は、周辺の樹木を伐採して待機場所を確保する必要がある。さらにこの広場に隣接して1人当たり2~3日分の非常食や水、毛布、寝袋、テントなどを備えた防災倉庫を設置しておくことが必要である。

3つ目が抜け道の造成である。津波の恐れがある緊急時、住民は神社に避難することにより命が救われる。しかし、津波が襲来した場合、低平地内は水没や漂流物で埋め尽くしているため、ここを通ることが困難となる。そのために避難住民ができるだけ早く二次避難所に移る経路を確保する必要がある。そこで、神社内に内陸部へ通じる避難路を整備する必要がある。天照御祖神社においては、写真-2(b)に示すように複数の抜け道が存在し、それらは神社の入り口と反対側の低平地に通じているものもあれば、付近に鎮座する神社へ通じているものもある。このような抜け道を神社内の避難路に定め内陸にある集落へ通じる道を整備すれば、神社に避難をした住民は再び低平地を経由することなく二次避難所へと避難することができる。

この避難路の完成後は、住民が中心となって日頃から避難路の清掃や点検、管理を実施し、津波がいつ発生しても確実に機能するように備えておくことが望まれる。住民が主体となって町の防災施設に接することで、住民の防災意識の啓発作用も生まれると考える。

(2) 周辺の整備

陸前高田に観光に訪れている人々でも災害時に円滑な避難ができるように、低平地の区画整理において神社へ一直線に通じるような道路を整備することを提案する。著者は東日本大震災発生前から定期的に陸前高田市を訪れているが、その時点では町内に多くの神社があることを知らなかった。また所在を知っていた神社においても、どこに入口があるのかを把握していなかった。その要因は、神社の入口が大通りを外れた裏道にあり、大通りを歩く人の目には届かなかったことによる。そのため土地に馴染みのない観光客にとっては、神社の所在が判りにくくなっている。

そこで、高田の町の詳細を知らない人でも津波時に容易に避難ができるように、市街地の道路はできるだけシンプルに設置し、神社に真っすぐ通じる道を作ることが重要である。写真-3に現状の旧駅前通りを示すように、新たな町作りの時に実施可能である。さらに、これと併せて避難所を示す案内板を数多く町に設置することが必要である。以上の点を踏まえて、神社を津波の際の一次避難所として活用することを提案する。

4. 神社の一次避難所化における問題点

神社の一次避難所化に向けて検討すべきことがある。神社のほとんどが鎮座する高田町の高台の桝は、写真-4に示すように急傾斜地崩壊危険区域に指定されてい



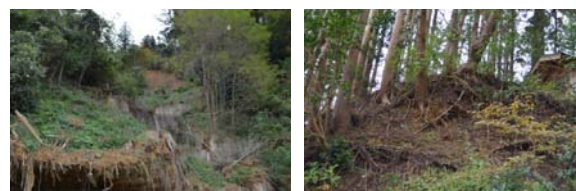
(a) 本丸公園広場 (b) 左奥に続く獣道

写真-2 天照御祖神社



(a) 海方面 (b) 内陸側

写真-3 旧駅前通りの現状



(a) 本宮神社 (b) 八坂神社

写真-4 急傾斜地崩壊

る箇所が多い。実際著者が神社を調査した際も、地面が一部崩壊している場所や樹木の幹がむき出しの場所を数多く確認した。ここでは2013年の秋に相次いだ台風に伴う大雨などにより、小規模な土砂崩れが発生している急傾斜地もあった。

仮に大きな地震が発生した際に大雨が降っていれば、避難所や避難路が土砂崩れ等によって崩壊する危険性もあり得る。神社を一次避難所とする際には、この点を考慮しなければならない。地盤の調査より土地の崩壊の危険性のある神社の場合は、別の場所に遷宮することも検討すべき課題である。

5. おわりに

本研究では、陸前高田市高田町において、現地調査に基づいて東日本大震災の津波の浸水を免れた神社を一次避難所に指定し、その神社を一次避難所として整備していく案を具体的に提案した。高田町内のすべての神社が被災を免れたわけではないが、数多くの神社が津波の被災をギリギリ逃れたことは、神社が過去の津波の関連性を想わずにはいられない。今後は高田町だけでなく、東日本大震災で同様に被災した市内の他の町の神社も調査し、被害の様子を明らかにしていく所存である。

<参考文献>

- 1) 村上他：陸前高田市高田町の一次避難場所としての神社のありかた，第40回土木学会関東支部技術研究発表会，IV-34,2013.3.
- 2) TBSテレビ「報道特集」：なぜ神社の手前で大津波が止まったワケ，2011年8月20日放送
- 3) 宇多他：2011年大津波の災害と被災を免れた神社，土木学会論文集B3(海洋開発)，2012.